

SUNDAY NIKKEI α



駆ける

日雇い労働者の街として知られる東京・山谷(さんや)にホスピスケア施設「きぼうのいえ」を立ち上げて三年半。民家と簡易旅館が混在する地域で、末期がんなどさまざまな難病を抱えながら、身寄りや行き場がない患者についてのすみかを提供している。

「人の悲しみを減らすために生きよう」と決意したのは、一九八五年の日航機墜落事故で恋人を失った男性が嗚咽(おえつ)する映像を見た時だった。当時二十二歳。「何を目標として生きるべきか悩んでいたが、自分の使命を示されたと感じた瞬間だった」と振り返る。

その後、国立がんセンタ

「きぼうのいえ」施設長 山本 雅基氏(42)



だ。そうした中で次第に「ホームレスや極端に困窮した人々が最期の時を豊かに過ごせる場所を作りた」と思うようになった。

二〇〇一年に大学の社会人講座「ホスピス・ボランティア」で出会った女性と結婚。新婚旅

ホームレスらに最期の場を提供

中央病院(東京・築地)で、がん闘う子供に勉強を教えるボランティア活動や、長期入院する子供の家族が病院近くで滞在できる宿泊施設の設立に力を注い

行先に山谷を選び「この場所にホスピスを建てることにこそ意義がある」と二人で決めた。新居に施設を併設し、〇二年十月にオープンにこぎ着けたが、「無謀

自分が生きてきた街で最期まで自分らしく生きる姿を、「東京のドヤ街 山谷でホスピス始めました」と題する本にまとめ、三月に出版した。「ただ寄り添い、地域全体でその人の一生を自然に受け止める。そんなケアを根付かせたい」と強く願っている。